

ジイジ・バアバ、
パパ・ママへ贈る

アヤと過ごすジイジの日記

心のめばえ

<33>

著者／牟田 泰三
挿絵／橋本 礼子

6歳1カ月
小雀の死

今日は西条幼稚園の盆踊りの日である。もう年長組になったアヤは、バアバに浴衣の着付けをもらいにママと一緒にやってきた。やってくる道すがら、小雀が路上に転がって死んでいるのを見つけたアヤは、小雀をそと両手で抱え上げると、ジイジの家まで持ってきた。

ジイジの家の庭では、毎朝スズメさんやキジバト(山鳩)さん達にお食事をあげている。その賑やかな光景を見慣れているアヤは、路上でコロリと羽だけ死んでいた小雀さんが可哀想でたまらない。ママやバアバに小雀のことを話しても、盆踊りに間に合うようにアヤに浴衣を着せようと大わらわで、さっぱりかまってももらえない。

それでも、とうとうバアバを庭に引っ張り出して

アヤ「この小雀ちゃんをなんとかして」

と騒いでいる。バアバはアサガオ棚の土を掘って

バアバ「じゃあ、この穴に小雀ちゃんを入れて

て土をかぶせてお墓にしましょう」

ということアヤは何とかおさまった。

盆踊りも終わり、翌朝となった。アヤが

やつてきたので、

ジイジ「昨日小雀ちゃんが死んでいたんだって？」

と聞くと

アヤ「そうだよ。それでバアバが穴を掘ってこのへんに埋めてあげたの」

と、庭のアサガオのそばを指さしている。

ジイジ「じゃあ、このへんが小雀ちゃんのお墓だね」

アヤ「うん」

ジイジ「それじゃあ、ジイジが小さい板に『小雀の墓』って書いてあげようか」

アヤ「それはやめた方がいいよ」

ジイジ「えっ、どうしていけないの」

アヤ「そんなのつけたらここが小雀の墓だとすぐ分かってしまうでしょ。悪い人が来て盗ってしまっよ」

ジイジ「それはないと思うよ。誰も小雀なんか盗っていったりしないよ」

アヤ「いや、盗られるよ」

いったいアヤはどうしてこんなことを考えるのだろう。小雀の死骸なんかを掘り出して盗っていくような間抜けな泥棒がいるわけじゃないか。

いや、しかし待てよ。アヤの気持ちになって考えてみよう。アヤの心の理論ではどうなっているのかな。アヤにとって小動物の死は生まれて初めての体験だったのだ。だから、小雀の死骸はアヤにとってはかけがえのない宝物に等しいものなのだ。アヤにとって小雀の遺体は宝物なのだから、アヤの心の理論によれば他の人も宝物だと思いに違いない。だとすると、それを盗っていこうとする人がいても不思議ではない。そうだ、心の理論に従えば、アヤの不思議な言動はよく理解できるではないか。

アヤの気持ちはよく理解できたけれど、残念ながら、大人はそうは考えないのだ。大人の心の理論では、アヤの考えは間違っていると思われる。アヤの考えがそのまま他の人にも当てはまるとはいえないのだ。成長とともにいずれは分かるであろう。幼児の純な心はそつとっておきたくなる。



プロフィール むた・たいぞう 1937年、福岡県生まれ。九州大学理学部卒業、東京大学大学院物理学専攻修了、理学博士。京都大学助手・助教授、広島大学教授・学長、福山大学学長などを歴任。主な著書に「語り継ぎたい湯川秀樹のことば」(丸善出版)、「電磁力学」(岩波書店)、「量子力学」(裳華房)などがある。東広島市在住。

「心のめばえ」のバックナンバーは、牟田のホームページでも読むことができます。下のQRコードをスマートフォンなどで読み取ると簡単にアクセスできます。



ジイジへのお便り

エッセーを読んだ感想などを、お寄せください。
weekly@pressnet.co.jp
「心のめばえ」係へ